



ヨーロッパ由来の弦楽器。アルパ(ハーブ)は植民地時代の面影を残している(メキシコ、メキシコ・シティ)



ドラム缶を再利用したスティール・パン(トリニダード・トバゴ、ポート・オブ・スペイン)



土製の容器の腹に穴をあけただけの打楽器(ブラジル、ベレン)



アフリカのアンゴラからもたらされたビリンバウ(ブラジル、サルバドール)

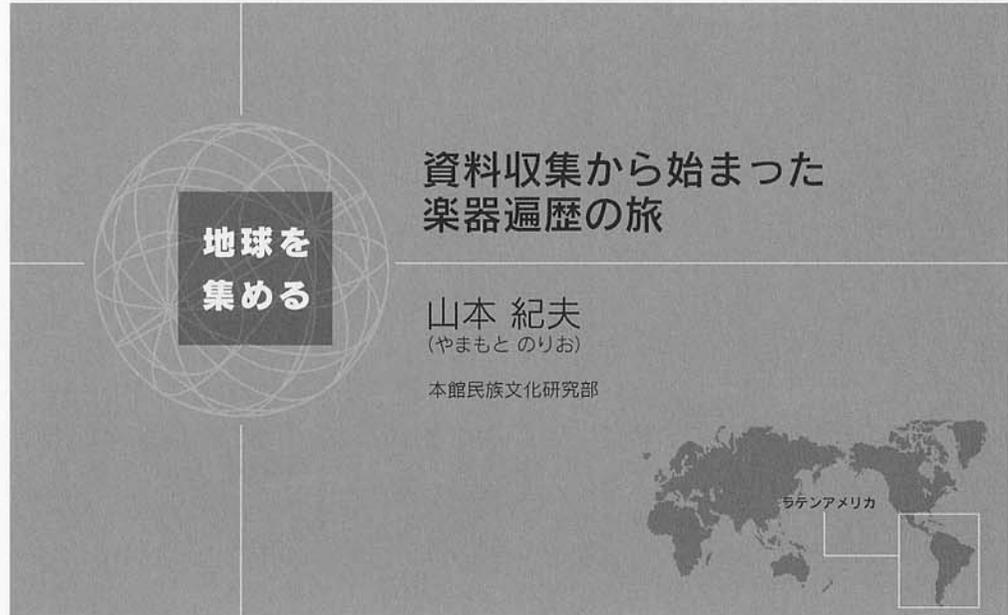


ボリビア東部低地の大型の笛、パホン(ボリビア、ペニ)

この展覧会でわたしの楽器をめぐる旅は終わるはずだったが、そうはならなかった。まだ見たこともない面白い楽器があると聞けば、アマゾンであろうと、アンデスの奥地であると、ついつい足が向かってしまふのである。そして、昨年末には民族音楽の専門家でないわたしが「ラテンアメリカ楽器紀行(山川出版社)という本まで出すことになってしまった。さらに、この秋には民博で「いま、よみがえる南米のパロツク音楽(仮題)という研究公演を計画し、植民地時代にヨーロッパから南米にもたらされた楽器を紹介するつもりである。こういうのを諺どおり「病膏膏に入る」というのかもしれない。

### 楽器遍歴の旅は続く

だが、やがて民博でラテンアメリカの楽器に関する展覧会がひらけないかという夢を生むことになる。この夢は一九九五年の春に実現した。企画展の「ラテンアメリカの音楽と楽器」である。阪神大震災の直後であったにもかかわらず、五万人あまりの多数の人たちが会場に足を運んでくださった。そのなかにはラテンアメリカの多彩な楽器の背景にある征服や融合の歴史を初めて知ったという声が少なくなく、展覧会の目的が達成されたと嬉しく思ったものである。



## 資料収集から始まった 楽器遍歴の旅

山本 紀夫  
(やまもと のりお)

本館民族文化研究部



### ラテンアメリカで出会う

もし民博に職をえていなければ、一生縁がなかったかもしれないと思うものがある。それは楽器である。それというの、わたしは楽譜がきちんと読めず、楽器らしい楽器の演奏は何ひとつできなかつたので、民博に就職するまで楽器とは一生縁がないと思っていたからである。

そんなわたしが楽器に大きな関心をもつようになったのは、初めて民博の資料収集の旅に出たとき、今から三〇年前の一九七七年のことであった。民博では開館を数カ月後にひかえ、同僚たちが展示の準備に、案内書作りなどに忙殺されていた。それを横目で見ながら旅に出たのは、ほかでもない、アメリカ展示に使え得る資料が少なく、それを少しでも補うためであった。わたしに与えられた期間は二カ月ほどしかなかった。展示に使えそうなものは片端から集めることにした。そのなかに楽器も含まれていた。

そんな収集調査の旅をコロンビアから始め、エクアドル、ペルー、ボリビアとアンデスを南下し、最後にブラジルまで行ったとき、面白いことに気づいた。それは、多種多様な楽器の存在である。南米では、打楽器、管楽器、弦楽器のいずれにもさまざまな種類の楽器が見られるのである。なかには、「これも楽器?」と思うような奇妙な楽器さえある。おそらく、世界中を見わたした

ても、これほど多種多様な楽器が見られるところはラテンアメリカにおいて他にはないかもしれない。そう思ったことが楽器に対する関心の始まりであった。

### 夢の展覧会実現

さて、それではラテンアメリカではなぜ変化に富んだ多彩な楽器が見られるのだろうか。こんな疑問をもつようになったわたしは、その後も中南米に出かけるたびに、本来の農耕文化に関する調査のかたわら、楽器を見て歩くようになった。また、一九八三年にもボリビアとブラジルで収集調査をおこなったが、このときの収集の中心は楽器となった。こうして、楽器に関心をもち続けているうちにラテンアメリカで多彩な楽器が見られる理由の二因がようやくわかってきた。それは、一言でいえばラテンアメリカにおける征服と融合の歴史が多種多様な楽器を生み出しているといことであった。

もしそうであれば、楽器をとどめてラテンアメリカの歴史や社会、文化を理解することができるとはならないか、という期待が生まれてきた。ラテンアメリカは一六世紀以降の比較的短いあいだにヨーロッパやアメリカから大量の人びとを受け入れた結果、この地の音楽や楽器もヨーロッパやアメリカの影響が色濃く刻印されているという見通しをえたからである。この見通